

ある青年期自閉症スペクトラム障害者の共感性

—心理劇的ロールプレイング場面における自己注視的役割取得と、自己指向的感情から—

松 崎 泰*

田 中 真理**

本稿では青年期自閉症スペクトラム障害(ASD)者の共感性における自己注視的役割取得と自己指向的感情および自己理解の関連に関する仮説生成を行うことを目的とした。ASD者の共感性の様相を捉えるため、集団心理療法のひとつである心理劇的ロールプレイングに参加した事例を対象とした。その結果、自身の経験を想起し、もし自分が他者になったらという想像から他者の心的状態を推測する自己注視的役割取得により、自己指向的感情を抱いていた青年期 ASD 者のエピソードが抽出された。そして他者とうまく関わることができないという自己理解が、自己注視的役割取得による自己指向的感情の喚起に与える影響について考察した。以上より、思春期・青年期 ASD 者は、対人関係におけるネガティブな自己理解を有するため、類似した他者を見た際に自己注視的役割取得を行いやすく、それは ASD 者の自己指向的感情の一因となる、という仮説が生成された。

キーワード：自閉症スペクトラム障害、共感性、青年期、心理劇

1-1. はじめに

自閉症スペクトラム障害¹(Autism Spectrum Disorder: 以下 ASD)は、社会的コミュニケーションおよび相互交渉の障害、行動、興味、活動の限局された反復された様式を中核的な特徴とする障害である(A.P.A., 2013)。筆者らが臨床場面・日常場面において思春期・青年期の ASD 者と接していると、他者のネガティブな経験についての話を聞いて、自身の他者と類似したネガティブな経験を思い出し、心理的に不安定になる様子と数多く出会う。ASD 者が想起する経験の多くは、自身の社会的場面における失敗経験であり、その失敗経験に伴った感情を再体験することが、心理的な不安定さにつながっている。これにより、慰める・援助するといった、ASD 者の他者への適切な反応が阻害されていると考えられる。本稿では、この状態像の背景には、どのような心理的プロセスがあるか仮説生成を試みる。

1-2. ASD 者の共感性

上述の ASD 者の様子は、ASD 者の共感性として検討されていると考えられる。本研究では共感

*教育学研究科 博士課程後期

**教育学研究科 教授

(Empathy)の定義を Hoffman (2000)や浅川・松岡(1987)に基づき、「他者や自己がどのような心的状態かを理解し、そのうえで自己より他者の置かれた状況に対して適切な感情反応」と定義する。

先行研究において ASD 者は共感性の弱さが指摘されている。以下ではまず共感性の構成要素について述べたのち、それら構成要素に関する ASD 者の共感性について述べる。共感性は、他者や自己の心的状態の理解といった認知的側面(以下:認知的共感)と、共感する者の感情反応である感情的側面(以下:感情的共感)が含まれる(Davis, 1994)。

まず認知的共感には、単純な他者の感情のラベリングという低次の過程と、他者の心的状態を他者の置かれた状況や他者の特性などから再構成的に理解する、役割取得(Role-Taking)という高次の過程が含まれる(例えば Strayer, 1993; 登張・大山・木村, 2010)。さらに役割取得は、自己注視的(Self-Focused)役割取得と他者注視的(Other-Focused)役割取得の2種類に大別される(Hoffman, 2000)。自己注視的役割取得は「自分があの人立場になったら」や「自分もそういえばあのとき…」という自己関連情報から役割取得を行うことである。他者注視的役割取得は「あの人はあの状況におかれていて…」という、他者がおかれた状況や、他者の性格など、他者についての情報、一般的な知識から役割取得を行うことである。

次に感情的共感には、他者へのあわれみのような他者指向的感情と、他者と同じ感情を抱く感情の共有、他者に対して苦痛や不快のようなネガティブな感情を抱く自己指向的感情が含まれる(Davis, 1994; Hoffman, 2000)。他者への他者指向的感情と感情の共有は、感情的な状態にある他者への関心を含む、適切な感情反応であり、成熟した感情的共感といわれている。一方自己指向的感情は、特にネガティブな感情を抱く他者を知覚した際に起きるといわれており、他者のネガティブ感情に応じて感情反応という点で共感的な要素が含まれるが、他者を回避することにつながりやすく、未熟な感情的共感であるといわれている(Davis, 1994)。

以下では ASD 者の共感性に関する先行研究について述べる。ASD 者はまず認知的共感においては、役割取得に弱さがあることが指摘されている(Yirmiya, Sigman, Kasari, Mundy, 1992; Rogers, Dziobek, Hassenstab, Wolf, Convit, 2007; Dziobek, Rogers, Fleck, Bahnemann, Heekeren, Wolf, Convit, 2008)。次に感情的共感では、自己指向的感情の起こりやすさが示されている(Rogers et al., 2007; Dziobek et al., 2008; Smith, 2009)。これらの先行研究のように、ASD 者の共感性についての知見は蓄積されつつある。しかし問題点として ASD 者の認知的共感と感情的共感との間にはどのような関連があるかは不明確であることがあげられる。特に、ASD 者において起こりやすさが指摘されている自己指向的感情に関して、どのような認知的共感特性があるか、これら先行研究においては明確に述べられていない。この点について、先述した ASD 者の状態像からは、ASD 者が自己注視的役割取得を行うことで、自己指向的感情を抱くことが示唆される。典型発達者においては、自己注視的役割取得が自己指向的感情につながるということが指摘されているもの(Batson, Early, Salvarani, 1997)、ASD 者においては自己注視的・他者注視的役割取得に焦点を当てた先行研究は乏しく、知見の蓄積が望まれる。

1-3. ASD 者の共感性涵養・評価の場としての心理劇的ロールプレイング

松崎・田中(2012)は、実際の場面の例をあげながら集団心理療法である心理劇的ロールプレイング(Psycho-Dramatic Role-Playing:以下PDRP)を通して、ASD者の共感性を涵養することの有効性を示唆している。心理劇的ロールプレイングとは、個人の心の内面の分析を主とした心理劇に基盤をおきながらも、社会的場面や教育的場面などのより広い範囲をとりあげ、参加者一人一人の成長を引き出すことを目指すロールプレイングであり、生活上の問題場面を、言語のみでなく即興劇を通して解決の手掛かりを目指すものである(台,1986)。

ASD者の共感性の涵養のためにPDRPが有効であること理由として、彼ら／彼女らの感情や思考の表出が、言語的のみでなく身体的に表出が可能であること、劇という形で視覚的にクライエントの問題が提示されること、劇を想像的に展開させながらミラー²などの技法を用い、自己理解・他者理解を深めることができることである(例えば高原,2012)。同時にこれらの特徴は、ASD者の劇の理解のしやすさにつながることや、劇中の他者を見ての解釈が話し合われること、感情表出が妨げられないことにつながり、ASD者の共感性の評価も行いやすい(松崎・田中,2012)。

PDRP中のASD者の共感性について、松崎・田中(2012)は、ネガティブな感情状態にある他者を見た際に、自身の類似経験を思い出すことにより自己注視的役割取得を行い、苦痛のような自己指向的感情が喚起している成人ASD者の存在を報告している。この報告から示されることは、先行研究においてASD者は役割取得において弱さがみられるといわれているものの、自己注視的役割取得を行う者がいること、そして自己注視的役割取得により自己指向的感情につながることもある、ということである。加えてこのASD者が自己注視的役割取得で語っていた経験は、ASD者の自己理解においても語られる職場での対人関係での失敗経験であった。言い換えると、事例のASD者の自己注視的役割取得および自己指向的感情の背景には、ASD者の対人関係での失敗経験が反映された自己理解の影響があることが示唆される。

1-4. 自己理解と自己注視的役割取得、自己指向的感情

一般に、自己注視的役割取得の行いやすさの原因として、先行研究からは、自己理解の特徴との関連がうかがわれる。自己理解とは、過去の経験の組織化であり、自己理解は他者理解に影響を与える(Markus, Smith, Moreland, 1985)。Markus et al. (1985)では重要と捉えられている自己理解に関係する他者理解の増進が認められていた。具体的には、「男性的である」などの5つの質問がどのくらいあてはまるかについて11件法で回答を求めた際に、自身のことをより男性的であると回答した男性は、そうでない男性に比べ、他者の男性的な行動の解釈が増進していることが示された。この結果は、男性的であることに価値を持ち、関係する知識や経験を多くもっているという自己理解の特性を持つ者は、他者の男性的な行動の解釈(他者理解)に、自身の知識や経験を用いたために他者理解が増進したと指摘されている。この自身の男性的な知識や経験を使用して他者理解を深めたという知見は、自己注視的役割取得に関連していると考えられる。

ASD者についての先行研究から、ASD者は思春期・青年期以降、他者からの叱責等を恐れ、過敏

になるといわれており（神尾・齊藤・井口, 2006）、自身や他者からの評価を踏まえ否定的な自己理解を抱く（滝吉・田中, 2011）。これは思春期以降の ASD 者の漠然とした「自分は周囲と異なるのではないか」という疑問（杉山・辻井, 1999）に通ずると考えられ、成人 ASD 者の自叙伝の記述においてもそれは支持される（Williams, 1992; Williams, 1994; Williams, 1996）。この思春期・青年期の ASD 者の自己理解特性は、対人的な場面でネガティブな感情を抱いている他者を、自分と似ていると認識すること、つまり他者理解をする際の準拠点として用いることにつながり、ASD 者の自己注視的役割取得の行いやすさを促進するのではないかと考えられる。そして、ASD 者の対人的な場面での否定的な経験や自己理解の想起は、他者を見る事がきっかけとなつての ASD 者の苦痛の感情、すなわち自己指向的感情の喚起につながると考えられる。以上の仮説モデルを Figure1 に示す。

このような ASD 者の状態像について、松崎・田中（2012）の事例に報告されているものの、さらなる事例の蓄積が求められる。理由として松崎・田中（2012）は、仕事での辛い対人経験から、否定的な自己理解を抱き、それが自己注視的役割取得および自己指向的感情につながっていた事例であった。そのため対人的な場面におけるネガティブな自己理解が、仕事以外の他の経験においても形成されるのか、そして自己注視的役割取得・自己指向的感情につながるか検討が必要であると考えられる。本稿では、松崎・田中（2012）に比べ相対的に年齢の低い青年期 ASD 者において、学校での対人関係から否定的な自己理解を抱いていたことが、自己注視的役割取得および自己指向的感情の喚起につながったと考えられる事例を報告し、知見の蓄積の一助とする。

2. 自己注視的役割取得および自己指向的感情がみられ、そこに事例の否定的な自己理解が関係していると考えられる ASD 者の事例

2-1. 事例の概要

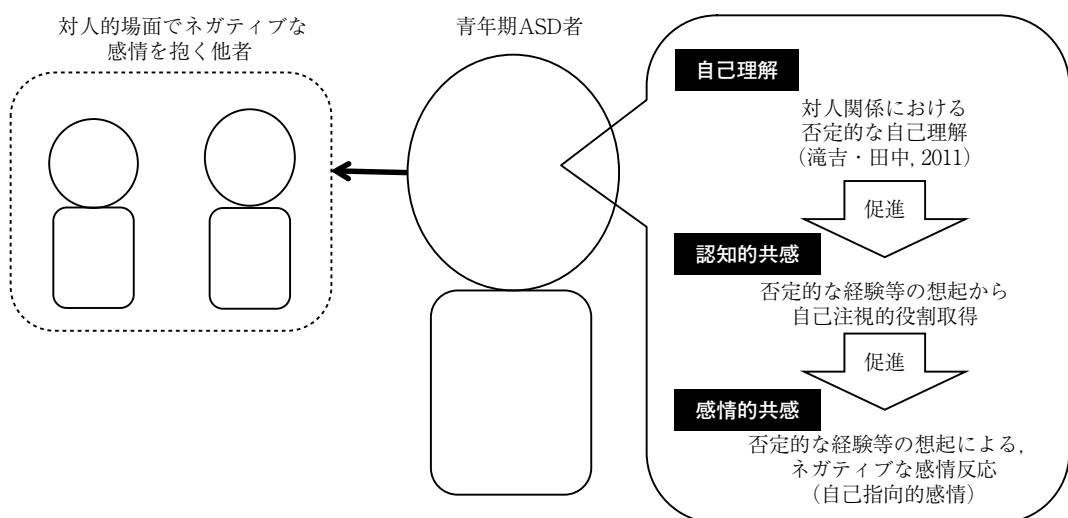


Figure1 青年期 ASD 者の自己理解と共感性に関する仮説モデル

グループ参加時私立高校2年生, 16歳男性のA³。小学校1年生時に, 落ち着かない, 一方的に話し続けるといった集団行動の難しさ, パニックを起こす等の状態から, 担任に相談機関を紹介され, 小学校2年生のときに医療機関でアスペルガー障害⁴の診断を受ける。小学校6年生時点で, 医療機関において障害名の告知を受けており, 本人も「僕はアスペルガー」と語る。中学2年生のころから学校での対人関係に悩み, 相談機関で個別カウンセリングを受けていた。そのセラピストからの紹介で高校2年生の春から, 著者らの主催するPDRPグループに参加していた。認知発達検査等の結果は不明であるが, 小中学校と通常学級在籍であり, 生育歴に学習上の遅れはエピソードとして聞かれないことから, 知的障害は合併していないと推察される。家族構成は父母と当時中学生の妹が2人である。

2-2. PDRP グループの概要

グループの目的は「自己理解・他者理解を深める」でありPDRPを行った。メンバーは, Aを含む高校生から社会人の発達障害者9名と, 大学生・大学院生・大学教員等の典型発達者11名であった。活動期間は201X年6月から201X+1年の5月まで, 月に1度, 毎回1時間半程度の活動時間であった(計12セッション)。Aは全てのセッションに参加していた。各セッションの流れは, 近況報告や簡単なゲームなどのウォーミングアップを行なった後にロールプレイングを行い, そのセッションから各メンバーが学んだこと・感じたことを報告しあうシェアリングを行った。各発達障害者は, グループの開始前と開始後に, 自己理解質問(Damon and Hart, 1988)を実施し, 自己理解の様相を捉えた。

2-3. PDRP でみられた共感性

(1) セッション7における共感性

201X年12月のグループ, 7回目のセッションにおけるロールプレイングであった。内容は, 他のメンバーが「実際にはそうではないのに, 自分が嫌われているのではないか」と考え込んでしまう場面であった。具体的には, 「他のメンバーZが他者と話していて, その他者が部屋を出て行く際に閉めたドアの音が, 舌打ちに聞こえる」という場面であり, 事例Aは役割演技を行うのではなく, 観客としてロールプレイングを見ていた。以下の場面は, メンバーZが「舌打ちに聞こえたかもしれないが, 本当はドアの音だ」と確かめる場面であった。この場面には, Zと他者役のスタッフ以外にも, Zの気持ちの役⁵として2名の演者がいた。以下は, その場面の具体的記録と事例の反応である。

(他者役)スタッフ1: じゃあ Z君, また来るからね。

(本人役) Z: あ, はい。

(他者役)スタッフ1: じゃあね。(と言い, 部屋から退出し, 壁を叩いて『カチッ』というドアの音を出す。)

(本人役) Z: (それを聞き、背中を丸めて下を向き、両手で頭を激しくかきむしる。)

(Zの気持ちの役) スタッフ2: ああ、やっぱり嫌われてるのかな。

(Zの気持ちの役) スタッフ3: でも、これって考え方の違いなんじゃないか? 頭と言葉、もうちょっと効率良くしたいなあ…。(事例Aはこの場面を口元を両手で左右から押さえるようにして見ている) >

(本人役) Z: (頭をかきむしった後、しばらく無表情でうつむいた格好だったが、[スタッフ3]「頭と言葉…」のあたりでふとベッドから降りる。そしてスタッフ1が退出した方向へ早足で歩いて引き戸を開け、閉める動作をすると、すぐに早足でベッドに戻る。

以上をまとめたものを Figure2 に図示する。以下は場面終了後の事例Aの感想である。「(他のメンバーが主役を務めた場面について述べたのち) 後Z君のRPでは、自分も嫌われたことがあったと思いました。僕は、あの、そういう風に嫌われないように努力したいと思いました(少し落ち着かないように背を逸らして周囲を見た後、足を二回ほど足踏みする)。

(Ⅱ) セッション9における共感性

201X + 1年2月、9回目のセッションであった。内容は、「震災時に妹が家に帰ってこず、妹を捜しに行った父母を待ちながら、別の妹と待っていた」場面であった。事例Aはテラー⁶として場面を見ていた。以下の場面は、父母が帰ってきた場面である。

(事例Aの妹役) スタッフ4: まだかなー? お母さんたち?

(事例A役) スタッフ5: きっと探してきてくれるから待っていよう。

(事例Aの妹1役) スタッフ4: えー、やばい、このまま帰ってこなかったらどうしよう。

(事例A役) スタッフ5: 大丈夫だよ。大丈夫、大丈夫。

(事例Aの妹1役) スタッフ4: まだかなー、まだかなー?

※ここに事例Aの母役・父役のスタッフが、妹2役を連れ帰ってくる。

(事例Aの母役) スタッフ6: ただいまー。

(事例Aの父役) スタッフ7: 大丈夫だったよ。

(事例Aの妹2役) スタッフ8: お兄ちゃん、ただいまー。

(事例A役) スタッフ4: おかえりー! (皆で肩を掴んで喜び合う)

以下がこの場面を見ての事例Aの反応である。「(落ち込んだような様子で) スタッフ5さんが演じる僕が、僕より、大人っぽかったです。」

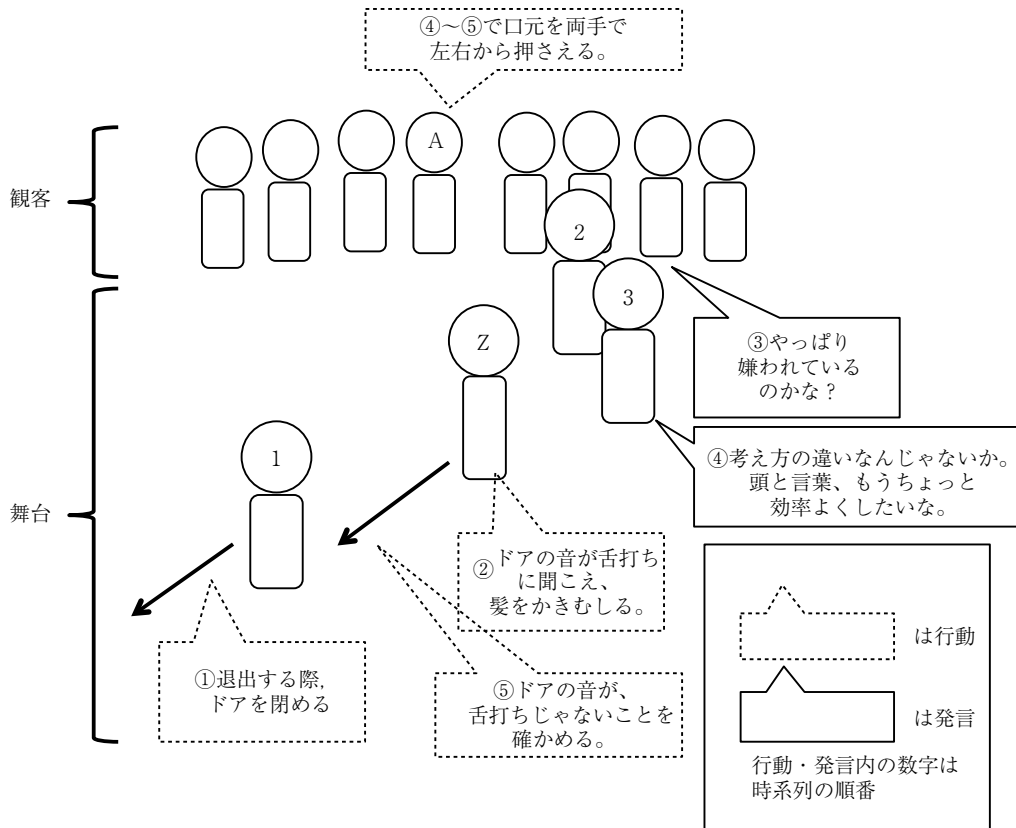


Figure2 PDRP の場面の例 (セッション7)

2-4. 事例の自己理解

以下はグループ開始前に聴取された事例 A の Damon and Hart (1988) の自己理解質問⁷における回答例である (< >は面接者, 「 」は事例 A の発言)。対人的な場面における否定的な自己理解が顕著であった, 自己定義に関する質問と自己の関心についての回答を抜粋した。また, 事例 A が面接中に, 唐突に自身のネガティブ経験を想起し, ネガティブな感情を体験した様子も記述する。

(1) 自己定義についての回答

<あなたは自分のことをどんな人だと思う?>「少し不思議なところもあると思いますけど, いろいろな性格を持つ人ですね。(中略)僕, 変っていますかね。高校でですね, ちょっといじられるときがあります。僕が不思議なのか, いい奴なのか分かりませんが, いじられるんです。」

(2) 自己の関心についての回答

<もし3つ願い事が叶うなら, どんな人になりたい?>「(生活リズムの規則正しい人間になりたいと話したのちに)悪いこだわりを無くしていきたい。あと嫌なことを言われても無視したほうがいいですね。逃げることができないので。でも休み時間なら逃げた方がいいですかね。」

(3) 面接中に唐突に自身のネガティブ経験を想起した様子

(面接中, 鼻をかんだ対象者に面接者が花粉症かアレルギーがあるの?と話しかけた際に)「ごめ

んなさい。変な事を思い出してしまいました。『あの人、僕のことを金魚アレルギーだと思っている』って…。金魚が嫌いだって思われているんです。アレルギーっていうか、金魚が嫌いだと思われることがあるんですね、それでちょっと…。ああ、それ以下は言いたくないです。あまりにも恥ずかしいので。』

3. 考察

3-1. 自己理解と共感性の関連

セッション7における事例 A は、認知的共感においては、「自分も嫌われることがある」という、メンバー Z と似た自身の経験を想起することで、メンバー Z の心的状態の理解を深めている様子がみられたため、自己注視的役割取得をしていたと考えられる。そして感情的共感において、事例 A は、自分はメンバー Z のようになりたくないと述べていた。これはメンバー Z の様子を見て、事例 A が自身の他者から嫌われた経験を想起し、苦痛を感じていたと考えられる。この苦痛は、事例 A がメンバー Z を見たために引き起こされたものであり、他者を見る事での不快や苦痛である自己指向的感情にあてはまると考えられる。

次にセッション9における事例 A は認知的共感においては、「僕より大人っぽかった」と、自身のことを思い浮かべ、自身との比較から他者を理解していたため、自己注視的役割取得を行っていたと考えられる。感情的共感において、事例 A は落ち込んだ様子を見せていた。他者を見て、その大変さにあわれみのような他者指向的感情を示すのではなく、「自分は大人っぽくない」という自身への落胆を強める様子から、自己指向的感情を抱いていたと考えられる。

事例 A の自己理解に関して、まず事例 A は、自身を「人からいじられる人である」と捉えていた。その理由として、事例 A は「自分の悪いくせ」が関係していると考えており、悪いくせを直して自分はいじられないようにしたいと考えていることがうかがえる。加えて事例 A のグループ参加についての主訴は「学校での嫌なことを相談したい」ということである。これらの様子を踏まえると事例 A にとって「学校でいじられて困っている人である」という自己理解が優勢なものであることがうかがえる。そしてその自己理解が前述の A の共感性に影響を与えているのではないかと考えられる。なぜなら A の自己注視的役割取得は、「自分も嫌われることがある」あるいは、「悪い癖があり、いじられる、大人っぽくない人」であるということであり、A の自己理解と同様のものであるといえるからである。

事例 A の共感性の様相の中心となっていたのは、学校での経験が元となつての「他者とうまくかかわることができない」という自己理解であった。この点に関して、思春期・青年期の ASD 者の直面する課題として、学校等の社会的場面での他者とのかかわれなさから「自分は他者と何か異なるのではないか」という自己への疑問を抱くと指摘されており(杉山・辻井, 1999; 小島・田中・井澤・田中, 2013), 事例 A はこのような指摘と一致する状態像を示していたと考えられる。

3-2. ASD 者における共感性と、自己理解の関連

ASD 者の共感性についての先行研究において、ASD 者の自己注視的役割取得の行いやすさについての実証的研究はなく、他者の心的状態を推測することの難しさといった特性から (Baron-Cohen, Leslie, Frith, 1985)、心的状態を推測するために他者から得られる情報が少なく、自己についての情報が用いられることがあると指摘されるのみにとどまっていた (Lombardo and Baron-Cohen, 2011)。

ASD 者は、自身に関する知識の記録-想起に関する効率化である自己準拠性効果 (self-reference effect) の乏しさといった知見等から (十一・神尾, 2001)、自身の経験を想起し他者の心的状態を理解する自己注視的役割取得の行いにくさが想定されてきたと考えられる。しかし年齢を重ね、特に学級や職場などの集団で「うまくかかわれない」経験が蓄積されることで、ASD 者は否定的な対人関係から自己理解をしやすくなり、その否定的な対人関係により形成された自己理解に基づいた行動をとりやすくなるのではないかと考えられる (神尾ら, 2006)。この「対人場面で失敗する自分」や「対人場面での失敗を避けたい自分」という自己理解は、類似の場面での他者を理解し、判断する際に、反映されやすくなる、つまり自己注視的役割取得を行いやすくなることにつながると考えられる。

3-3. 結論と今後の課題

松崎・田中 (2012) の報告や、思春期・青年期の本事例の様相を鑑みると、以下の仮説が生成されたと考えられる。すなわち、ASD 者は他者が対人的な状況でネガティブ感情を抱いている際に、自己注視的役割取得を行いやすいこと、そしてそれが ASD 者の自己指向的感情の起こりやすさの一因になっていること、これらには思春期・青年期以降の ASD 者の対人関係に関する否定的な自己理解が要因として関係しているということである。

今後の課題として、これら事例から仮説生成された ASD 者の状態像が、思春期・青年期 ASD 者にとって普遍的なものであるのか、仮説検証型の検討が求められる。この点について、先行研究においては、直接 ASD 者の自己注視的・他者注視的役割取得に焦点を当てたものは存在しない。そのためまず ASD 者が典型発達者と比較して、より自己注視的役割取得を行う状況があるのかを検討する必要があるだろう。その後、ASD 者の対人関係に関係する自己理解との関連で、ASD 者の自己注視的役割取得および、自己指向的感情について検討することで、思春期・青年期以降の ASD 者の共感性の様相の一端を明らかにし、その支援につなげることができると考えられる。

【付記】

A さんと PDRP グループのメンバーに感謝申し上げます。

本研究は科学研究費補助金 (基盤研究 (B) 課題番号 2333270 / 研究代表者 田中真理) の助成を受けた。

【引用文献】

- A.P.A. (2013) Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Fifth Edition. American Psychiatric Association.
- 浅川潔司・松岡砂織 (1987) 児童期の共感性に関する発達的研究. 教育心理学研究, 35, 231-240.
- Baron-Cohen, S., Leslie, A. M., Frith, U. (1985) Does the autistic child have a "Theory of mind"? Cognition, 21, 37-46.
- Batson, C. D., Early, S., Salvarani, G. (1997) Perspective Taking: Imagining How Another Feels Versus Imagining How you Would Feel. Personality and Social Psychology Bulletin, 23, 7, 751-758.
- Clayton, G. M. (1992) Enhancing Life & Relationships: A Role Training Manual Book 2 in a series of training books. マックス・クレイトン 中込ひろみ・松本 功 (訳) (2013) ロールトレーニング・マニュアル ーのびやかに生きるー. 二瓶社.
- Damon, W. and Hart, D. (1988) Self-understanding in childhood and adolescence. Cambridge University Press.
- Davis, M. H. (1994) Empathy: A Social Psychological Approach. Boulder: Westview Press. デイヴィス, M. H. 菊池章夫 (訳) (1999) 共感の社会心理学. 川島書店.
- Dziobek, I., Rogers, K., Fleck, S., Bahnemann, M., Heekeren, R., Wolf, T., Convit, A. (2008). Dissociation of cognitive and emotional empathy in adults with Asperger syndrome using the Multifaceted Empathy Test (MET). Journal of Autism and Developmental Disorder. 38, 464-473.
- Hoffman, M. L. (2000) Empathy and Moral Development. Cambridge University Press. ホフマン (M. L.) 菊池章夫・二宮克美 (訳) (2001). 共感と道徳性の発達心理学. 川島書店.
- 神尾陽子・齊藤崇子・井口英子 (2006) 自閉症スペクトラム青年のネガティブ表情に対する過敏性. 児童青年精神医学とその近接領域. 47(1). 16-28.
- 小島道生・田中真理・井澤信三・田中敦士 (編著) (2013) 思春期・青年期の発達障害者が「自分らしく生きる」ための支援. 金子書房.
- Lombardo, M. L. and Baron-Cohen, S. (2011) The role of the self in mindblindness in autism. Consciousness and Cognition, 20, 130-140.
- Markus, H., Smith, J., Moreland, R. (1985) Role of the Self-Concept in the Perception of Others. Journal of Personality and Social Psychology, 49, 6, 1494-1512.
- 松崎 泰・田中真理 (2012) 心理劇的ロールプレイングを通してみられたある青年期自閉症スペクトラム障害者の共感性. 東北大学大学院教育学研究科教育ネットワークセンター年報, 12, 89-95.
- Yirmiya, N., Sigman, M., Kasari, C. and Mundy, P. (1992) Empathy and cognition in High-Functioning Children with Autism. Child development, 63, 150-160.
- Rogers, K., Dziobek, I., Hassenstab, J., Wolf, T., Convit, A. (2007) Who cares? Revisiting empathy in asperger syndrome. Journal of Autism and Developmental Disorder. 37, 709-715.
- Strayer, J. (1993) Children's Concordant Emotions and Cognitions in Response to Observed Emotions. Child Development, 64, 188-201.
- 杉山登志郎・辻井正次 (編著) (1999) 高機能広汎性発達障害 ーアスペルガー症候群と高機能自閉症ー. プレーン出版
- 滝吉美知香・田中真理 (2011) 思春期・青年期の広汎性発達障害者における自己理解. 発達心理学研究. 22, 3, 215-227.

登張真穂・大山智子・木村あやの(2010) 中学1年生の共感における役割取得と並行的感情反応, 他者指向的反応, 感情理解の関係. パーソナリティ研究, 19, 2, 122-133.

十一元三・神尾陽子(2001) 自閉症者の自己意識に関する研究. 児童精神医学とその近接領域, 42, 1, 1-9.

台 利夫(1986) ロールプレイング. 日本文化科学社.

Williams, D. (1992) Nobody Nowhere. 河野万里子訳(1993) 自閉症だったわたしへ. 新潮社.

Williams, D. (1994) Somebody Somewhere. 河野万里子訳(1996) ころろという名の贈り物. 新潮社

Williams, D. (1996) Like Colar to The Blind. 河野万里子訳(2002) ドナの結婚. 新潮社

【註】

- 1 Autism Spectrum Disorder の訳語について, 現在議論がなされている。本稿では, 先行研究と語が異なることで生じる混乱を避けるため従来用いられてきた訳語である「自閉症スペクトラム障害」を用いた。
- 2 劇を中断し, それまでの劇の主役を別のメンバーに演じてもらう。その際元の主役は, 舞台の外から別のメンバーが演じる「主役」を観察し, 気づきを得る (例えば Clayton, 1992)。
- 3 事例の公表は, 保護者の了解を得ている。なお事例は, 本質を損なわない程度に細部を一部変更したものである。
- 4 DSM-5 (A.P.A., 2013) では ASD に包含される。
- 5 PDRP において, 「父」や「母」といった実在の人物の役割以外に, 「怒っている気持ち」や「悲しい気持ち」といった, 人の心の内面の一部の役割を演じる場合がある。
- 6 テラーの語りをもとに即興劇を行う, プレイバック・シアターという手法を加味したセッションであった。テラーは他者の演じる自己のエピソードについての即興劇を見ることで, 自己理解を深める。
- 7 「自分のことをどんな人だと思う? (自己定義)」や「自分のいいところはどんなところだと思う? / 自分の悪いところはどんなところだと思う? (自己評価)」, 「5年前の自分は, 今の自分に比べてどうだった? / 5年後の自分は, 今の自分に比べてどんなところが変っていると思う? (過去・未来の自己投影)」, 「もし3つ願いが叶うとしたら, どんな人になりたいですか? (自己の関心)」といった質問を行い, 対象者が自己をどのようにとらえているかを評価するものである。

Case Study: Empathy of an Adolescent with Autism Spectrum Disorder : Self-focused Role-Taking and Self-oriented Emotion During a Psychodramatic Role-Playing Session

Yutaka MATSUZAKI

(Graduate Student, Graduate School of Education, Tohoku University)

Mari TANAKA

(Professor, Graduate School of Education, Tohoku University)

The purpose of this paper is to form a hypothesis about the empathy of an adolescent with autism spectrum disorder (ASD), specifically self-focused role-taking, self-oriented emotion, and self-concept. This paper reports the case of an adolescent male with ASD who showed self-focused role-taking and self-oriented emotion during a psychodramatic role-playing session. Empathy comprises cognitive empathy and emotional empathy. Generally, people with ASD have difficulty with cognitive empathy, especially role-taking. However, the case in this paper suggests that people with ASD may be prone to self-focused role-taking by a negative self-understanding, which is common among adolescents with ASD.

KEYWORD : Autism spectrum disorder, Empathy, Adolescence, Psycho-drama.